文の容認性世代間差から見る言語変化

ガ/ノ交替に着目して

○新国佳祐・和田裕一・小川芳樹 (非会員)

(東北大学大学院情報科学研究科)

キーワード: 言語変化, 世代間比較, ガ/ノ交替

Ga/No Conversion and language change: An intergenerational study of acceptability judgments

Keiyu NIKUNI, Yuichi WADA and Yoshiki OGAWA[#]

(Graduate School of Information Sciences, Tohoku Univ.)

Key Words: language change, generational differences, *Ga/No Conversion*

目 的

これまで、主に大規模な通時コーパスの分析により、様々な言語変化現象の事実が確認されてきた。例えば、ガ/ノ交替という格交替現象(“太郎が買った本”→“太郎の買った本”)は、いくつかのコーパス上にその生起頻度の通時的な減少傾向が見られる(e.g. 小川, 2016)。ガ/ノ交替にかかわる言語変化は最近 100 年程度の比較的短いスパンで観察することができるが、一方で、その変化が現在でも進行中であるかどうか、進行中であるならばその様相はどのようなものかについては議論の余地がある。そこで本研究では、現代を生きる話者を対象として、ガ/ノ交替文の容認性を問い、その世代間差に着目することにより、進行中の言語変化とその様相を捉えることを試みる(cf. Harada, 1971; 新国他, 印刷中)。もし当該言語変化現象が現在なお進行中であるならば、コーパス上にみられる生起頻度減少に対応して、ガ/ノ交替に対する容認性が、話者の世代が若くなるに従って低下することが予測される。

方 法

参加者 日本語(東京方言)母語話者 540 名が参加した。参加者はその年齢が 65-74 歳である群、45-54 歳である群、25-34 歳である群のいずれか(各群男女 90 名ずつ)に属していた。
材料 ガ/ノ交替生起可能性のある以下 3 タイプの刺激文を各 12 文用意した。

- (a) 体が/の細い人は、格闘技に向かない。
- (b) 夕焼けが/の赤いことは、考えてみると不思議である。
- (c) 趣味が/の競馬であるおじは、休日にいつも出かける。

(a)の「X が/の Y 人(...)」の形式は、形容詞 Y が名詞 X の状態を表すタイプ(以下、状態文)、(b)の「X が/の Y こと(...)」の形式は、形容詞 Y が名詞 X の属性を叙述するタイプ(以下、属性叙述文)、(c)の「X が/の Y である Z(...)」の形式は、形容名詞でない名詞 Y が名詞 X と主述関係を満たすタイプ(以下、コピュラ文)である(cf. Harada, 1971)。

手続き 各刺激文をガ主語文(例: “体が細い人...”)とノ主語文(例: “体の細い人...”)のペアで呈示し、それぞれの容認性を 5 段階で尋ねた。呈示順序はペア単位でランダム化し、ペア内では半数の参加者には統一してガ主語文を先に、もう半数の参加者にはノ主語文を先にして呈示した。調査はすべてウェブ調査の形式で行われた。

結 果

回答が不適切と判断された 69 名のデータを分析から除外した。その後、各刺激文に対する容認性評定値(0~4: 大きいほど容認性が高い)を従属変数として、3(年齢群: 65-74 歳/45-54 歳/25-34 歳) × 3(文タイプ: a/b/c) × 2(主語: ガ/ノ)の 3 要因混合計画による分散分析を行った。

図 1 に、条件ごとの容認性評定値の平均(95%信頼区間)を示す。分散分析の結果、年齢群 × 文タイプ × 主語の交互作用が有意であった($F=22.23, p<.001$)。年齢群の単純主効果に関する下位検定の結果、文タイプ(b)および(c)のノ主語条件

図 1. 条件ごとの年齢群別容認性評定値平均。

でのみ年齢群の単純・単純主効果が有意であり($ps < .001$), それぞれ多重比較の結果、文タイプ(b)-ノ主語条件ではすべての年齢群間の差が、文タイプ(c)-ノ主語条件では 65-74 歳群と他の 2 群との差が有意であった($ps < .01$)。

考 察

調査に用いた 3 タイプの刺激文のうち、属性叙述文(a)においてのみ、ガ/ノ交替の容認性に明確な世代間差が見られた。話者の世代が若くなるに従ってノ主語文の容認性のみが低下していることから、少なくとも属性叙述文で生起するガ/ノ交替については現在なお言語変化進行の過程にあると結論できる。一方で、コピュラ文(c)においては、65-74 歳群と他の群との差のみ見られ、状態文(a)ではガ/ノ主語文いずれにおいても世代間差が検出されなかった。このうち、コピュラ文で生起するガ/ノ交替は、Harada (1971) では当時 40 歳代の話者は容認するが 20 歳代の話者は容認しないことが示されており、小川 (2016) では 1960 年代を最後にコーパス上から完全に消失していることが示されていることから考えると、世代を追って低下した容認性がすでに 45-54 歳群で下限に達している可能性がある。対照的に未だ高いガ/ノ交替容認性を示す状態文で明確な容認性の世代間差がみられず、全体的にややその容認性が落ちる属性叙述文で若年者ほどガ/ノ交替を容認しなくなるという結果は、進行中のガ/ノ交替に関する言語変化の様相とは、特定の環境(ここでは、属性叙述文やコピュラ文)におけるノ主語文の許容可能性が連続的かつ一方向的に低下し、ある限られた環境(つまり、状態文)でのみガ/ノ交替が許容されるようになる過程であることが示唆される。※本研究の一部は JSPS 科研費(JP16K02753, JP17K13438)および公益財団法人 博報児童教育振興会「第 12 回児童教育実践についての研究助成」の助成を受けたものです。

引用文献

- Harada, S. (1971). Ga-no conversion and idiolectal variation in Japanese. *Gengo Kenkyu*, 60, 25-38.
- 新国佳祐・和田裕一・小川芳樹 (印刷中). 容認性の世代間差が示す言語変化の様相: 主格属格交替の場合. 認知科学.
- 小川芳樹 (2016). 属格主語を含む関係節・形式名詞節の通時的な状態化と語彙化について. <http://ling.human.is.tohoku.ac.jp/change/workshop3.html>